



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	島義史著, 『新規農業参入者の経営確立と支援方策－施設野菜作を中心として－』, 農林統計協会, 2014年, 202頁
Author(s)	濱村, 寿史
Citation	フロンティア農業経済研究, 19(1), 47-48
Issue Date	2016-04-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66093
Type	other
File Information	19-1-5_hamamura.pdf



書 評

島 義史 著

『新規農業参入者の経営確立と支援方策—
施設野菜作を中心として—』
(農林統計協会、2014年、202頁)

北海道立総合研究機構根釧農業試験場 濱村 寿史

本書は、施設野菜作での新規参入を対象として、創業から経営確立までのプロセスと支援のあり方を明らかにしたものである。創業とその後の取り組みに重点を置き、参入側と支援側の双方から分析を行っているところに大きな特徴がある。

まず、1章では、論点として①新規参入者の経営確立、②地域における新規参入支援、③新規参入者と受入側の関係を提示したうえで、既往の研究成果を整理し、新規参入者が有形・無形の経営資源を獲得、蓄積して経営を確立するまでの過程を、参入側と支援側の双方から分析し、新規参入プロセスと支援のあり方を明らかにすることを本書の課題として設定している。

第2章では、既往のアンケート調査の結果を用いて、新規参入者の農業所得や経営上の課題、公的機関による支援措置の利用状況等、新規参入者と支援の動向を整理している。

第3章では、引き続き、既往のアンケートデータを用いて、創業後の経過年数と経営面積や農業所得の関係を分析し、主に酪農と比較しつつ、施設野菜作に取り組む新規参入者の経営展開の特徴を明らかにしている。離農した経営を引き継ぐ方式での新規参入が多い酪農に比べ、施設野菜作では、創業後に栽培面積を拡大して経営確立を図るというプロセスをたどること、家計費を概ねカバーできる水準の農業所得に到達するには長期間

を要するとみられることを示し、経営ステージに応じた対応と、プロセスの短縮が求められているとしている。

第4章では、新規参入者の成長プロセスの解明を試みている。具体的には、新規参入者の経営ステージを区分し、経営ステージ内および経営ステージ間における経営管理の重点対象の変化について、パネルデータを用いた時系列分析を行うことで、栽培管理・作業管理・財務管理（創業ステージの重点対象）→販売管理（創業ステージの途中から重点対象）→雇用管理（拡大ステージの重点対象）→コスト管理（拡大ステージの途中から重点対象）という順で経営者機能が充実されることを明らかにしている。

第5章では、公的機関による新規参入支援の到達点と課題を明らかにしている。まず、事例における支援の実態を先行研究で示された支援のポイントに対応させて整理し、公的機関による支援の到達点を明らかにしている。その上で支援に対する新規参入者の評価をもとに、残された問題点を検討し、改善に向けた課題を考察している。さらに、受入側である地域の農家や橋渡し役農家を対象として、新規参入者と地域の農家の関係形成に要する期間（見極め期間）や地域への円滑な溶け込みのための要件について検討している。対象とした事例では、先行研究で示された支援に求められる条件を概ね具備しており、継続的な新規参入支援を実現しているが、創業後のフォローアップが十分には行われておらず、経営確立までの期間を短縮するためには、成長プロセスに沿った支援の充実も含めて、支援の改善を図ることが必要だとしている。また、地域の農家による新規参入者の見極め期間は創業後3～4年と長期間に及ぶこと、一方で、橋渡し役農家や支援に積極的な農家の見極め期間は短いことを明らかにしている。このことから、創業後間もない時期は橋渡し役農家の活動が特に重要になること、地域の農家と新規

参入者の関係形成の機会を早くから設けることによって、見極め期間を短縮できることを示唆している。

第6章では、農家グループによる新規参入支援の効果を分析している。対象とした事例では、共同で行われる販売活動によって高い販売価格を実現するとともに、グループにおける情報の交換・共有が経営管理に対する意識の強まりや情報収集の積極性の向上をもたらしていることを明らかにしている。このことから、農家グループによる支援では、「与件形成的」機能と「主体陶冶的」機能の面の双方から新規参入者の経営の確立を促進し、新規参入プロセスの短縮に寄与していると考察している。さらに、農家グループのリーダーによる支援内容の分析を通じて、橋渡し役農家の役割について検討している。支援の内容をメンタリング機能の分類に従って整理し、各経営ステージにおける支援授受の頻度を分析することで、橋渡し役農家は、新規参入者に対して幅広い支援を提供していること、新規参入者の経営ステージに応じて支援を変化させていることを明らかにしている。

第7章では、農家グループと公的機関が連携して支援を行うことの効果について分析を行っている。対象とした事例では、農家グループが公的機関と連携して「与件形成」と「主体陶冶」の両面から支援を行うことにより、従来の支援の制約を緩和し、新規参入プロセスを短縮していることを明らかにしている。

そして第8章では、第3章から第7章までの要約として本研究成果の到達点を整理した上で、新規参入者の経営確立と地域での定着の円滑化に向けた支援のあり方について論じている。

以上のように、本書は、施設野菜作での新規参入を対象とし、経営確立のプロセスを明らかにした上で、支援のあり方について論究した体系的な書である。中でも、以下の2点において新規性、

重要性が高いと感じた。

1点目は、パネルデータを用いた時系列分析により、新規参入者の成長プロセスを解明した点である。これまで、蓄積が十分ではなかった新規参入者の成長プロセスを実証的に解明しており、今後、先行研究として絶えず参照されるものになるだろう。本書では公的機関による支援が行われる下で施設野菜作に取り組む新規参入を対象としているが、今後は、より多様な新規参入者を対象とした分析を蓄積しつつ、さらに理論を深化させることが望まれる。

2点目は、橋渡し役農家や農家グループによる支援の効果の解明を試みている点である。橋渡し役農家の重要性は以前から指摘されていたが、その効果は十分検証されていない。また、近年注目される新規参入支援を行う農家グループについては、著者が指摘する通り、わずかな例を除いて分析は行われていない状況にある。これらに対し、本書では新規参入者の成長プロセスを踏まえた上で、多様なアプローチにより支援の効果の解明が試みられている。ただし、農家グループに関する研究はまだ端緒についたばかりであり、さらなる効果の検証や形成される条件の解明が望まれる。

本書は、実態分析に基づき、新規参入者の成長プロセスに応じた支援のあり方まで論及した実践的な書でもあり、研究者のみならず、新規参入支援の実務者にもお勧めしたい。